

カリマンタンの怒れる人々

山 中 潤 *

調査を始めて間もなくのある日、泥炭湿地林の川をボートで進んでいると、森の中の川で水浴びをしている村人に出くわした。私は微笑んだつもりであったが、村人は水をまき散らしながら、私たちのボートに怒りの言葉を向けてきた。カメラを持った見知らぬ外国人に、自分の水浴びを邪魔された、あるいは馬鹿にされたと思ったのだろう。

もちろん私がフィールドワーカーとして未熟であったが故の出来事であるが、誰しも自分の空間に見知らぬ他人が勝手に入ってきて、自分の行動を邪魔することを良くは思わないだろう。しかしながら、インドネシア・中央カリマンタン州の泥炭地ではそのようなことが度々発生し、住民は自分たちの土地であるにもかかわらず、外部からの介入を経験してきた。

私が調査を行っていた M 村は、中央カリマンタン州カプアス県に位置し、泥炭地の上に立っている。中央カリマンタンの州面積の 17.3% を占めるこの泥炭地とは、有機物が冠水条件下で十分に分解されないままに生成した有機質土壌のことである [DNPI 2009; 嶋村 2012]。その特質故に、泥炭湿地林を農地化するには水路を掘削して排水し、泥炭を乾燥させ、地上部の植生や泥炭を燃や

して栄養分を供給する必要がある。しかし苦勞して泥炭湿地林を拓いても、泥炭は著しく貧栄養の土地である。そのため、泥炭土壌がやや薄くなり鉱物質土壌がみられる河川沿いに地域住民は住んでいたものの、泥炭湿地林



写真1 メガライスプロジェクトで掘削された泥炭地の中の排水路



写真2 燃えた泥炭湿地林

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真3 住民の火入れによる煙



写真5 伐採した木材を運搬する住民



写真4 対岸が霞むほどの泥炭地火災による煙



写真6 村の未来を担う子どもたち

は長らく人々の生活や開発の中心ではなかった。

しかしスハルト政権下の1997年、中央カリマンタン州の南部に分布する泥炭地では「メガライスプロジェクト (Mega Rice Project)」が実施された。これは、排水路を掘削して、泥炭地100万ヘクタールを潮汐灌漑によって水田として開発する計画であった。¹⁾ M村周辺の泥炭湿地林も伐開され、排水路が建設された。なおM村の周辺の森は、地域住民が昔から利用してきた土地である

が、法律上は国家が管理する国有林である。地域住民が自分たちの土地として、その権利を訴えることはできない。そしてそのような状況の下、政府が住民の土地に介入し、泥炭地開発のプロジェクトを行なっていった。

しかしながらこのメガライスプロジェクトは、1999年には、当初の目的を達成できず失敗に終わってしまったことが公式に認められた。²⁾ 開発は、過剰な排水により灌漑に必要な水までも排出して、泥炭の状態を大幅に劣化させるという問題を引き起こした。ま

1) Presidential Decree No. 82/1995.

2) Presidential Decree No. 80/1999.

た、泥炭が乾燥して泥炭地火災が起きやすくなってしまった。特にエルニーニョが発生した1997年の乾季、メガライズプロジェクトエリアを含む泥炭地において大規模な火災が発生した。1997年にインドネシア全体では、化石燃料による全地球的炭素放出量の年平均値の13-40%に相当する0.81-2.57 Gtの炭素が泥炭の火災によって放出された [Page *et al.* 2002]。

M村の住民も、「1997年の火災は大きかった。そしてメガライズプロジェクトのあと、明らかに泥炭地火災が増えた」と口にしていった。M村周辺においても、泥炭地火災によって農作物が被害を受けたり、住民が林産物を採集する森が焼けたという。また、火災の煙は人々の健康にも悪影響を及ぼした。

一方、2000年代に入ると、今度は泥炭地保全の名目で介入が始まった。泥炭湿地林での住民による木材伐採が違法とされ、政府による監視の目が厳しくなった。M村の村長によると、2000年頃までは住民の80%が木材伐採を生業としていた。しかしながら、監視強化や木材の減少により、現在では20-30%の世帯が従事するに留まる。

更に2007年には、中央カリマンタン州全体で、泥炭地で火を使うことを禁止にする法律が制定された。³⁾ 住民による伝統的な焼畑農業が、泥炭の発火原因として非難されたためである。M村を含む泥炭地の住民は、焼畑農法で米や野菜を栽培してきた。泥炭が薄い場合は、泥炭を火で燃やすことによって、

下の鉱物質土壌を表面化させることができる。また植生を燃やすことによって、土壌を肥沃にし、雑草を生えにくくする。そして火入れの際には、河川を単位とした農民グループで火を監視したり、家族で火を管理することによって、他人の農地に火が移らないように注意してきた。

しかし2007年以降、「火を監視・管理できなくなった」と住民は言う。泥炭地で火を使用しているところを警察に見つかれば、処罰されてしまうからである。このことは、この法律の本来の目的、つまり泥炭地火災を防ぐことに対して、皮肉にも逆の効果を生み出している。火を監視できなくなったことで、火の拡大を引き起こしてしまっているのだ。

しかしそもそも、政府のプロジェクトで荒廃した泥炭地において、火災の原因を地域住民に押し付け、住民の生業を規制しようとするのはおかしい話である。住民からすれば、先祖代々利用してきた泥炭地を、「泥炭地開発」という名前で取られ、生業を困難にさせられたあげく、今度は逆の「泥炭地保全」という名目で土地に介入され、またもや生業を規制されている状況である。

このような状況では、冒頭の水浴びの住民同様、自分の土地に入ってきて生活の邪魔をする政府に対して、人々が怒るのも頷ける。実際にインタビューの中では、さまざまな怒りの声、嘆きの声を聞いた。「森は燃えて木は少ないし、監視が厳しい。」「河川は上流の砂金採掘で汚染されて、魚の数も減って

3) UU24/2007 tentang Penanggulangan Bencana.

いる。」「そのうえ、泥炭地での焼畑農業まで禁止されたら、どうやって食べていけばいいのか。」「しかも肥料や殺虫剤は村の行政や有力者で留まって、我々の手には届かない。」人々の怒りは、もっともである。

さて冒頭の話の続きだが、その後4時間かけて川の上流まで遡り、Uターンして村に帰り始める頃には日没に近づいていた。どうやら雲行きも怪しい。そう思っていたら、雨が降り始め、しまいには雷もなり始めた。太陽が沈むと、周りは真っ暗な泥炭地である。豪雨と雷と風と真っ暗闇の中、水面ぎりぎりを走るボート。寒さと心細さから、もしかして私は、さっきの水浴びをしていた住民を怒らせ、何か黒い力でも使わせてしまったのではないか、と考え始めた。迫りくる圧倒的な自然の中で、私が乗る小さなボートはあまりにもちっぽけで、論理では説明できない力を見せつけられた気さえたのだ。その後無事に、懐中電灯で先を照らしながら村に到着した時には、心底ほっとしたのを今でも覚えている。

話が脱線したが、このような自然豊かな泥炭湿地林や泥炭農地を、住民は伝統的に利用・管理してきた。しかし、近年になって政府がさまざまな名目で介入してきた時には、住民の力は弱く、怒りの声もむなしく、たとえば呪いや黒い力でさえかなわなかったであろう。政府の力は圧倒的で、住民は土地の法的な権利ももっていないのだから。

最後になるが、2015年の乾季にも、インドネシアのカリマンタンやスマトラの泥炭地

は大火災に見舞われた。そして年末には、気候変動枠組条約の締約国会議（COP21）で、インドネシアを含む全世界が、温室効果ガスの排出削減に向けて動き出した。このような流れの中、一体次はどのような政策にM村の住民は翻弄され、生活を規制されるのだろうか。彼らは、今度こそ怒りの声を届けることができるだろうか。そして、自分たちの土地の権利を得て、政府と対等に、泥炭地のより良い利用のあり方・保全のあり方を議論できるだろうか。

もし仮に、雷や雨を私に降らせたカリマンタンの神々がいるとするならば、今後、人々の生活と泥炭地の保全が両立されることを、彼らに祈るばかりである。

引用文献

- 嶋村鉄也. 2012. 「熱帯泥炭湿地の概観」川井秀一・水野広祐・藤田素子編『講座 生存基盤論第4巻 熱帯バイオマス社会の再生—インドネシアの泥炭湿地から』京都大学学術出版会, 103-127.
- Dewan Nasional Perubahan Iklim (DNPI). 2009. Fact Sheet—Indonesia Greenhouse Gas Emission Cost Curve, Jakarta. <<http://forestclimatecenter.org/files/2009-08-27%20Fact%20Sheet%20-%20Indonesia%20Greenhouse%20Gas%20Emission%20Cost%20Curve%20by%20Indonesia%20National%20Council%20on%20Climate%20Change.pdf>> (2014年11月24日アクセス)
- Page, S. E., F. Siegert, J. O. Rieley, H. D. V. Boehm, A. Jaya and S. Limin. 2002. The Amount of Carbon Released from Peat and Forest Fires in Indonesia during 1997, *Nature* 420(6911): 61-65.